

〈実践報告〉

大学に求められる外国人児童生徒のための日本語教育支援 —千葉県山武市と大学連携の実践事例から—

林 千賀 ・ 萩原 幸司 ・ 高柳 真理
佐藤 明子 ・ 本城美和子 ・ 羽鳥美有紀

【要旨】

近年、成田国際空港（以下、通称、成田空港）に隣接する千葉県山武市では、貿易に携わるスリランカ人家庭の児童生徒が急増している。そこで、同市では小中学校9校で取り出しの日本語支援が行われており、児童生徒たちの日本語力の向上が進められている。山武市教育委員会では、前例の無い国からの受け入れが始まり、児童生徒の日本語学習をどのように実施するべきか、城西国際大学に支援が求められた。そして、本学の日本語教育に携わる筆者ら教員（以下、本稿では日本語教育専門家と呼ぶ）を中心とした日本語支援の活動が2022年3月の講習会を機に始まった。これまでの主な支援は、山武市教育委員会と連携をとり、教育委員会・日本語支援員を対象とした本学日本語教育専門家による講習会、取り出し教室の支援現場の観察と教室担当者に対するフィードバック、本学の国際交流演習（林ゼミ）生が実践している外国人児童生徒を対象とした交流会などである。そして、2023年度からは、これらの支援に加えて、筆者らの研究活動も始まった。そこで、本稿では、大学に求められる日本語教育専門家による日本語支援の活動と研究活動について具体的に報告する。

キーワード：外国人児童、日本語支援、交流会、アセスメント、実践的な日本語教育

1. はじめに

成田空港に近い山武市では、スリランカ児童生徒の急増に伴い、小中学校で取り出し教室による日本語支援が行われている。児童生徒は親の仕事の都合で来日するため、新学期に関係なく学期の途中であっても、次々に編入学しているのが現状で、そのため小中学校に在籍する外国人児童生徒の日本語レベルも様々である。

山武市教育委員会は、当初、城西国際大学にシンハラ語や英語の支援協力を求めてきたが、話し合いの結果、2022年3月に筆者の林が山武市教育委員、小中学校の教諭、日本語支援員を対象とした日本語教授法の講習会を本学で行い、児童生徒のためのTPR（全身反応教授法）や、具体的な教材・教具の探し方などを内容として扱った。そして、それを機に筆者ら日本語

教育専門家の日本語教育支援が始まった。2022年3月から筆者らによる講習会と観察支援、そして本学国際交流学科の学生による交流会と大きく3つの支援活動がそれぞれ行われた。そして、2023年度以降も継続が望まれたため、山武市教育委員会と城西国際大学は、2023年1月18日に外国籍の児童生徒への日本語教育支援に係る連携協定¹を締結した（図1）。連携協定やこれまでの活動は、千葉日報（2023年1月23日）、毎日新聞（2023年1月31日）、読売新聞（2023年3月18日）などで報道されてきた。また、The Japan News（The Yomiuri Shinbun 3月26日）においても英字で林ゼミの交流会活動が取り上げられ、国内外において本学の取り組みが紹介された。



協定書を手にする（左から）内田淳一教育長、杉林堅次学長、松下浩明市長

外国籍の住民が急増している千葉県山武市での日本語教育支援を円滑に行うことを目指し、本学と山武市が1月18日、「山武市及び山武市教育委員会と城西国際大学との外国人児童生徒の日本語教育支援に係る連携協定」を締結しました。これを機に、外国人の児童生徒への日本語教育だけでなく、子どもたちに日本語を指導する教職員への支援にもさらに注力してまいります。

図1 日本語教育支援に係る連携協定の締結式の様子

本学ホームページより（<https://www.jiu.ac.jp/news/detail/id=13289>）

連携協定以後、2023年度4月からは、本学日本語教育専門家（筆者ら）が、山武市の支援者（山武市日本語教室日本語担当者を含む）を対象に、山武市市役所に場を移し、「日本語教室担当者会議」において毎月、講習会を行うこととなった（全10回）。講習会は、毎回異なるテーマでディスカッション中心の勉強会として実践されている。本稿ではこれらの取り組みについて概要を述べることとする。

2022年6月には、山武市教育委員会からの要請を受け、筆者ら日本語教育専門家は、市内の小学校と中学校の取り出し授業を観察し、改善点や感想などをフィードバックとしてレポートにまとめた。それらは取り出し教室の担当者に、教育委員会のW氏を通じて渡された。本稿では2022年度の観察でどのようなフィードバックをしたのか、レポート内容を紹介する。

また、2022年8月からは山武市教育委員会と本学地域連携推進センターの協力のもと、本学の国際交流演習（林ゼミ）の学生が中心となって2022年度の夏休み期間（全5回）と9月

から2月までの期間（全6回）、日本語支援を目的にスリランカ人を中心とした児童生徒との交流会を実施²してきた。林ゼミは、異文化コミュニケーションや「やさしい日本語」を学び、それらを実践することを目的にするゼミである。ゼミ生には、日本語教員養成課程（副専攻）を履修している学生だけでなく、日本語教師を目指している学生もいる。そして、学内の学生研究活動に申請し、学生の活動に関するアクションリサーチも始まった。11月の大学祭や12月に研究発表会もあり、2023年度も継続して5月から、林ゼミ生は毎月、「山武市わくわく館」で交流会を実施している（全12回）。2022年度の取り組みについては、林（2023）で報告されており、2023年度の取り組みについては、今後、実践研究として投稿する予定である。

本稿では、大学に求められる日本語教育専門家による支援の実践と研究活動について具体的に報告することを目的とする。第2章では、本学日本語教育専門家による講習会とその支援について詳細を述べる。そして、第3章では、取り出し教室の観察とフィードバックについて述べ、第4章では、筆者らによる研究活動の概要について触れ、最後の第5章では、本稿のまとめと今後の課題について述べることとする。

2. 「日本語教室担当者会議」における講習会について

文部科学省初等中等教育局国際教育課では、1999年から「日本語指導が必要な外国人生徒の受け入れ状況に関する調査」を実施している。「日本語指導が必要な児童生徒」とは、「日本語で日常会話が十分にできない児童生徒及び、日常会話ができて、学年相当の学習言語が不足し、学習活動への参加に支障が生じており、日本語指導が必要な児童生徒」と定義されている。そのような子供たちには、「在籍学級から取り出して、別教室において日本語能力に応じて特別の指導」が行われている。2009年には担当教員の指導力向上のための「JSL（第二言語としての日本語）カリキュラム」が作成され、以降、教材開発や教え方など支援者の教育力向上の取り組みなどが行われており、外国人児童のための支援者を対象とした研究も進められている（熊崎，2003、古川，2017、大野・原，2016、林，2021、山下・成・渡部，2022、藤原，2022）。

そのような情勢の中で山武市の取り出し教室では、日本語がわからない児童・生徒に対する日本語支援の方法を探ることが喫緊の課題となっていた。従って、本学の教員たちに具体的な教え方などを教示してもらいたいという要請があり、2023年度に日本語教育専門家による講習会が行われることになった。

2023年度の講習会は、月に1度行われる「日本語教室担当者会議」の中で60分から90分ほどの講義が以下の表1の内容でそれぞれ実施された。講習会を担当する講師は、筆者ら専門家の6名であった。内容については、大きく2つに分類できる。

まずは、参加者たちのニーズを探ることから始まり、教え方の具体案が示された。それらは取り出し教室でどのような日本語支援を行っているのか、どのような悩みがあるのか、その情

報共有の場としてディスカッションを中心に行い、それらの解決策などを提案した。従って、第1回、第3回、第4回、第6回の講習会では、参加者に寄り添い、どのような問題があるのか、指導上、困っていることなどのヒヤリングを行った上で、解決策など具体的な指導方法を提案した。そして、実践的な教え方の取り組み例や、実践例を示した。

2つ目は、外国人児童生徒に対するアセスメントについてである。山武市教育委員会では、児童生徒のアセスメントの方法を探っており課題となっているため、アセスメントについての講義も第2回、第5回、第7回、第8回で行った（表2）。第2回では、DLA（外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント）の概要説明、第5回では、OJAE（Oral Japanese Assessment Europe; CEFRに準拠した日本語口頭産出能力評価法の概要とCEFRで能力を捉えることの重要性、第7回に『JSLバンドスケール』（川上郁雄氏らが開発）についての概要と実践を行った。そして、第8回は、DLAの実践を行った。アセスメントについては、以下、補足を加える。

2012年には、公立小等中等教育の要請もあり、文部科学省初等中等教育局国際教育課は、2012年には公立学校に在籍する日本語指導が必要な児童生徒のための教育充実のために「外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント」（DLA: Dialogic Language Assessment）を開発した。これは一対一の対話を通して測る支援つき評価方法である。そして、教育現場のニーズによって「全国的にどの学校でも使用可能な日本語能力測定方法」として文部科学省（文科省）が東京外国語大学に依頼し開発されたものである。それ以降、DLAアセスメントに関する研究（中野，2016、石渡，2020、田中・田邊・神山，2022）が進められている。このDLAは、日本語力のみならず、教科学習で学ぶための認知力の発達段階も考慮された測定方法で、この測定法は会話力を中心として読解力、作文力、聴解力の習得度を測定するものである。しかし、DLAは、日常会話はできるが、教科学習においては学習が困難な生徒を対象としているため、日常会話力程度（初期指導段階）の外国人児童の日本語力を測定することができかねるが課題である。そこで、日常会話程度レベルの外国人児童の日本語力を測定するには、ヨーロッパで開発されたCEFR（Common European Framework of Reference for Language: Learning, teaching, assessment; 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ参照枠）に準拠した日本語口頭産出能力評価法OJAE（Oral Japanese Assessment Europe）（萩原他，2020）が有効であると予測できる。OJAEは、これまで日本語を母語としない日本語学習者を対象に実践研究されてきており（萩原他，2020, 2022, 2023）、外国人児童を対象とした実践は未だ蓄積されていないが、開発メンバーには年少者教育に精通した者もいるため対応することは可能である。従って、OJAEとDLAそれぞれの方法によるアセスメントを比較対照したうえで、山武市の外国をルーツに持つ児童生徒のためのより良いアセスメントを提案したいと考え、講習会においてもアセスメントについて触れる必要があった。そして、第7回の講習会では、川上（2020a, 2020b）が開発した「JSLバンドスケール」の説明を行い、実際に同じ学校で教えている児童生徒を取り上げて、自分たちが把握している児童生徒の日本語能力をJSLバンドスケールで

チェックしてもらい、児童生徒の日本語力に関しての情報をシェアし総合的な評価をする練習を行った。しかし、項目が多すぎて実施運営に向けては難しいのではないかという声も上がった。

図2は2023年度第2回目の講義の様子である。外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントについて質疑応答でこのアセスメントの概要について説明がなされたが、事例から示すことができなかった。図2で示したように講習会は、月に1度の割合で開催された。



図2 令和5年度「日本語教室担当者会議」での第2回講習会の様子
(出典：山武市教育委員会)

次に「日本語教室担当者会議」内で実施された講習会の概要を表1にまとめた。講習会の内容は、参加者のニーズによって変更されたものもあり、参加者とのディスカッションが多く取れるよう工夫するよう努めた。

表1 令和5年度「日本語教室担当者会議」での講習会

	回と担当者	講義名	概要
4.20.木 15:30～ 野菊プラザ 2階会議室	第1回 林千賀	「やさしい日本語」と 指導上の問題点	初回では、まずは参加者のニーズを探ることから始まった。そして、学習者の日本語レベルに合わせてどのように日本語を調整するのか、その方法について講義を行った。実際にやってみるという活動を行ったが支援員は「やさしい日本語」への書き換えに困難さを示していた。今後の支援として必要な内容や問題点などについて質問をし、その結果を参加者とシェアしながら議論した。支援者たちは日本語の教え方よりむしろ、日本の学校環境に慣れていない児童生徒にどう伝えればいいのか悩んでいるケースもあった。例えば時間の概念が母国と異なるため、遅刻や欠席などについての注意が必要であるなどであった。
5.18.木 15:30～ 市役所書庫 第6会議室 に於いて	第2回 林千賀	外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント (DLA)	児童生徒の日本語能力をどう評価するか、文科省が提案したDLA (「外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント」) について概要を述べ、日常的な学校生活に必要な会話についてディスカッションした。DLAに関する基本的な概念やなぜアセスメントが必要なのか、その重要性について概観したが、実践例で示すことはできなかった。また、教材「みえこさんの日本語」「たのしい学校」などで教え方などを振り返った。
6.28.水 15:30～ 市役所書庫 第6会議室 に於いて	第3回 本城美和子	実践的な日本語教室 の事例紹介	外国籍児童生徒教育の現状についての概要説明。その後、実践的な日本語教室の取り組み事例をレベル別に3例紹介した。そこで取り入れられている指導方法や使用されているツールなどの確認を行った。 残りの時間に、講師のこれまでのスリランカ人児童生徒を指導した経験などから、効果的と思われる指導方法の提案や情報の共有を行った。
7.13.木 15:30～ 市役所書庫 第6会議室 に於いて	第4回 佐藤明子	これまでの振り返りと教科書を使った実践紹介	初回からの講義を受け、実践したことや改めて疑問に感じた点などを共有した。またそれぞれ実践の場で工夫している点について情報交換し、より活動的になる案を模索した。この活動を通じ、参加者間での実践の共有があまりされていないことが分かった。その後、短時間だが『みえこさんの日本語』の一部を使った実践を紹介した。
8.25.金 10:00～ 城西国際大 学図書館1 階、オリエン テーション ルーム	第5回 萩原幸司	日々の支援の中で CEFRを如何に参照 すべきか	第1部：日本語教育に於いて「ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR)」を如何に参照すべきか／第2部：CEFR準拠OJAE (Oral Japanese Assessment Europe) とOJAE道場 今後、日本語支援を展開していく上で、文化庁 (2021) が提示した「日本語教育の参照枠」は大きな指針となることが予想されている。そうした現状を踏まえ、本講義では、先ず、「日本語教育の参照枠」の母体となっている「ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR)」の歴史と理念を紐解き、その適切な理解を説いた。続いて、CEFRに準拠して開発された口頭能力評価法OJAEについて、最初期から研究開発グループの一人である論者の視点から、現在までの実践を紹介し、CEFRを活用した日本語教育実践の可能性を参加者と共に考えた。
9.14.木 15:30～ 市役所書庫 第6会議室 に於いて	第6回 本城美和子	話すから書くへとつ なげる活動のワーク ショップ	参加者に実際に活動してもらい、2・3人のグループでトピックに合わせたQ&A作成と会話。その後、書きの活動へとつなげ、ミニ作文を書く。ガイドッドコンポジション的活動の実践体験を行った。ガイドッドコンポジションは、初級レベルの学習者に有効な作文指導の方法である。

	回と担当者	講義名	概要
10.12.木 15:30～ 市役所書庫 第6会議室 に於いて	第7回 高柳真理	外国でクラス児童のアイデンティティ、日頃は把握している児童生徒の日本語のスケールを使って評価してみる。『JSLバンドスケール』より	日本語教育が必要な児童生徒を受け入れている各学校では、それぞれの児童生徒の日本語能力のレベルを見極め、学習計画を作成し、その評価をすることが求められている。そのため、日本語のアセスメントを実施、日本語評価をすることが急務となっている。今回は、日頃、色々な状況下で同じ児童生徒の日本語に触れている日本語支援員たちに、日々把握している日本語をどのような視点で評価することができるのか、また、個々の日本語支援者たちがそれぞれに把握している児童生徒の日本語レベルを共有することで総合的な理解を深める活動を行うために、生活言語能力と学習言語の能力について取り上げた後、川上郁雄氏が開発した「JSLバンドスケール」の説明を行い、実際に同じ学校で教えている児童生徒を取り上げて、自分たちが把握している児童生徒の日本語能力をJSLバンドスケールでチェックしてもらい、児童生徒の日本語力に関する情報をシェアし総合的な評価をする練習をした。その後、実際にしてみた感想を共有した。
12.14.木 市役所書庫 第6会議室 に於いて	第8回 高柳真理	外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント（DLA）の実践	児童・生徒の日本語レベル評価に関する学習の第2回目。今回は、実際にDLA（日常会話はできるが、教科学習に困難を感じている児童生徒のために開発された言語能力測定ツール）の使い方について実施した。実際に日本語を学習している留学生を例としてビデオを作成し、そのビデオを閲覧しながら参加者が各自で日本語レベル評価を経験した。評価内容は、DLAの評価対象児となりうるかを評価する「会話導入」「語彙力チェック」と、「話す」を行った。各自評価実施後、全体でグループワークをした。今回のビデオ対象者（高校まで母語で教育を受けた学習者であり、思考力、認知力が培われた者）と山武市の児童・生徒（日本語学習と共に認知力育成も求められる日本語学習者）に触れ、学習者の母語評価をする重要性を伝えた上で発達障害と見なされる危険性などの点も共に考えた。
1.11.木	第9回 羽鳥美有紀	シラバスの再確認と具体的な指導方法	現場で使用されているテキストのシラバスを再度確認し、具体的な指導方法を紹介し、実践をしてみる予定である。来年度に向け、具体的な指導方法を紹介した。具体的には、現場で使用されている『みえこさんの日本語』の25課を例にあげ、導入から練習、定着までの一連の流れを実施。練習では、インフォメーションギャップや代入練習なども含め実践した。また、支援員からの要望を受け、「て形の導入」についても紹介した。学習者自身に気づきを与える導入とはどのようなものか、全員で考え、検討した。その後、実際にインパクトある導入の仕方や、学習者自身で気づくことができるような導入を実践しながら紹介した。その他、現場では教材が不足しているということから、webで公開されている外国人児童向けの教材を紹介した。また、日本語教育で使用されているテキストも持参し参考にしてもらった。
2.8.木	第10回 羽鳥美有紀	今年度の振り返りと今後の取り組み（予定）	今年度の講習会を振り返り、来年度に向けた日本語支援策や、具体的な実践方法を検討する予定である。

(筆者ら作成)

以上、山武市の日本語教育支援員に対する講習会の概要を示した。次に2022年度に行った取り出し授業の観察とそのフィードバックについて次章で述べることとする。

3. 取り出し授業の観察とそのフィードバック

千葉県山武市は近年、外国人児童、特にスリランカからの児童生徒が急増している。スリランカ人児童生徒の数は、2022年7月29日の時点では、48名（全62名）であったが、2023年4月20日の時点で、68名（全80名）に増えており、全体の85％となっている（日本語教室担当者会議会報）。また、全ての外国人児童生徒の70％は、「日本語がわからない（聞く・話す）」（レベル1）、「生活で意思疎通ができるが、学習が難しい」（レベル2）と判定された児童であり、初期指導段階にあるため、取り出し教室で日本語を学んでいる。

そこで、山武市教育委員会は、本学に依頼し、筆者ら日本語教育専門家の「取り出し教室」の観察が始まった。観察後は、フィードバックのレポートを作成した。本稿では、2022年度に行った授業観察について取り上げ、以下、表2にレポートの内容について示す。

表2 山武市立N小学校の授業観察レポート

1. 概要
〔訪問先〕 山武市立N小学校 〔実施日〕 2022年6月13日（月）8:30-12:15 〔訪問教員〕 城西国際大学 留学生別科 別科長 林千賀 語学教育センター 高柳真理／佐藤明子／羽鳥美有紀
2. 所感
<p>学校に楽しそうに來ている生徒さんの様子から、先生や職員のみなさまの生徒たちに対する対応などがしっかりされていると感じました。そして、授業を通して、先生と生徒の関係性がとても良好のように思いました。</p> <p>ワールドクラス（この小学校での取り出し授業の通称）を担当されているY先生は、英語を用いながら日本語を教えていたので、児童とのコミュニケーションは問題ないと思いました。また、T先生（スリランカ人）は、授業内の学習活動に遅れをとっている、注意が向いていない生徒に対して、サポートしていました。児童にとって恵まれた学習環境だと思いました。</p> <p>その他、我々は普段、大学生を対象とした言語教育のため、今回の見学で児童の言語習得との違いにも気づかされ、学ぶことがたくさんありました。</p> <p>以下、見学を通して気づいたことなどを所感としてまとめました。</p> <p>【全体を通しての所感】</p> <ul style="list-style-type: none">➤ Y先生（日本人教員）は英語を使用しながら教えていたため、児童は何の勉強をしているのか、よく把握しており、模範的な授業といえると思います。英語を使用した児童への日本語教育は日本では珍しいのではないかと思います。カードゲームをしたり、授業でもカラーゲームをしたりしていたので、遊びの中で単語を覚えることができるように、かるたなどは効果的ではないかと思います。人数によって、日本語能力も異なるため、個別指導も行われていました。ただ、ひらがなを「あいうえお」の順番で書くのではなく、先生が意味のある単語（例えば、「みかん」の絵教材で示し）を言って、それを書くようにしてひらがなの練習（書き）をするのもいいと思います。そうすると、ただ作業的に書くのと違い、聞きとりの練習、そして意味も一緒に覚えることができると思います。➤ ワールドクラスが準備され、生徒が何かあればその部屋で勉強ができるという環境は、生徒の精神的支えになっていると強く感じました。また、T先生（スリランカ人教員）が細かくフォローすることで安心して授業を受けることができていると思いました。➤ ワールドクラスが生徒たちにとって心のよりどころであり、心理的な安全を確保できる場所という印象でした。先生方も熱心に愛情にあふれており、ラポールが形成されているのが伝わりました。このクラスがあるから学校に通えているような印象もあります。➤ 日常語やマナーをゲームや本を読むことを通して学んでいけるのはいいと思います。そして、時々ワー

ルドクラスをのぞく日本人生徒たちがいたので、日本人生徒と一緒にゲームをしたり、ゲームを教えたりするなど、彼らが活躍できる場が持てると相互理解につながるように思いますし、日本語を話したいという気持ちを醸成できるのではないのでしょうか。

- 一方で、ここで学んだことがワールドクラス外で生かせるような工夫も必要と感じました。小学校、中学校と義務教育で学ぶこともとても多いことから、元の学級にどう還元できるか課題に感じました。
- 所属クラスでの生徒の様子、ワールドクラスでの様子を見まして、ワールドクラスが生徒達にとって自分の居場所としてとても大切なのではないかと思います。
- 先生と生徒のラポート、信頼関係ができていて、楽しく学習できてとてもいいと思いました。絵など用いる、誕生日の人の話題など、場面設定が分かりやすく、実際のコミュニケーションを経験しながら、(するように)学習できているのに感心いたしました。
- 児童の言語習得と大学生の場合との違いにも気づかされました。

【授業の場面ごとの気づきと提案】

●朝の会

- 読書の時間にプリントをやるはずだったにもかかわらず、児童は積極的に関わっている様子は見られませんでした。しかし、取り出し授業(ワールドクラス)になると元気になっていました。我々の見学が悪影響を及ぼしていたとすると大変、申し訳ない気持ちです。
- 遅刻が多いそうで、時間の概念の教育をおこなっていたことは感心しました。このように文化差による理解の教育は日本語以上に大切だと思いました。
- クラスの中の一員としての状況が、垣間見られてよかったです。見学者がいるということでどの生徒も少々緊張気味になっていたと思いました。

●今月の歌

- 歌についての提案です。「大きな栗の木」「小さな栗の木」「面白い栗の木」「怖い栗の木」の絵で導入してから、代入で歌い、ジェスチャーを加えながら一緒に歌ったかどうかと思いました。形容詞の導入ができると思います。そして、「仲良く遊びましょう」「動詞+ましょう」も代入できると思います。「仲良く笑いましょう」「仲良く学びましょう」「仲良く走りましょう」「仲良く歩きましょう」などです。ただし、児童の日本語レベルによると思います。1ヶ月間かけて少しずつ取り組めばいいと思いました。
- 今月の歌は30日間同じものをするようなので、語彙の代入練習をしていくのは楽しみながら語彙を増やせそうです。Y先生とT先生は英語が堪能でいらっしゃるので、意味の確認をしながらだったら文法も入りそうです。ただ、通訳が期待できない学校であれば、絵カードを多用していくといいように思いました。

●自己紹介

- 自己紹介のやり方の提案として、まずはグループに分かれて(例えばA先生に紹介するグループ、B先生に紹介するグループ)自己紹介をしてから、皆の前に立たせて自己紹介をする(情意フィルタを下げるための活動)といいと思います。いきなり皆の前に立たせると緊張する学生もいますので、まずは小さいグループからしてみたらいいのではないのでしょうか。ただし、いろいろなやり方があると思いますし、児童の性格をよく把握している先生が決められたらいいと思います。

●学校の規則を読む

- ひらがな1つだけの練習ではなく、文脈の中でひらがなと意味を確認しているので、とてもいいと思いました。
- 授業全体を通して、文字を「読む」時間が少ないように感じました。学校の規則だけでなく、ひらがなが読めるようになった生徒は、どんどん本を読むようにすると思います(絵本からスタート)。そうすれば、朝の読書の時間も日本人と一緒に本を読むことができるのではないかと思います。
- 多読用の絵本もいいですね。日常の動作についてひらがなで読めますので、日常の語彙が増えそうです。読めるようになったら、その生徒さんに先生になってもらい、他の生徒に教えてあげる(又は読んであげる)と、互いに学びあえそうですね。

●誕生日で日にちの確認とあいさつ

- 「たんじょう日」のひらがなチェックと曜日のチェックについてとてもいいと思いました。
- 日時のチェックは気長に毎日行う必要があると思いました。
- 「おかえりなさい」と「ただいま」の導入についてみんなで反復練習をもっとしてもいいと思いました。
- 板書で、「たんじょうび」の平仮名の「よ」が上の方に書かれている(通常下側)のが、何か目的があると思いますが、少々気になりました。

●「私はNが好きです」の練習

- Nの語彙の紹介が終わり、「Nが好きです」の全ての練習した後は、個人化(学生自身、自由に聞く「どんな果物が好きですか」)の質問が必要だと思いました。

以下、練習の提案です。

「いちご」「みかん」などの語彙導入活動の後、カードをバラバラにしてカルタにする。

先生：「いちご」と取ってもらいたい果物の名前を言う。

児童：「いちご」のカードを取ったあと、「はい、私はいちごが好きです」と言う。

間違えたとき、皆が「いいえ、〇〇さんはいちごが好きじゃないです」の「じゃないです」を導入する。

また、カルタのやり方で文法を入れていく方法もあると思います。

- 「○」と「×」の教具を使っているのは効果的だと思います。学生も楽しそうでした。
- ある程度言えるようになったら、クラスメイトに「どんな食べ物が好きですか？」と聞いてまわって習得につながる方法もいいと思います。
→ フォームなど確認ができましたら、実際に生徒の好き嫌いを言ってもらい、その中から自分達、クラスメイトが知らない単語等を紹介し、生活中に必要な語彙力を高めていくというのも（子どもではそこまで集中が続かないかもしれないのですが）いいと思いました。最後は、自分についてのことを話させるというのがいいように思いました。また、「大好き」という言葉を生徒から発して、表現を豊にしていくなど、全員でよい影響を出しながら共に学んでいる様子が分かりました。
- この単語は日本語で何？と聞いたとき「ば・な・な」など、生徒たちの多くは、一拍ずつ言えていたので、拍の感覚がついているのが分かりました。言えていない生徒たちは、今後この感覚をしっかり養っていくと、特殊拍及び特殊音を学びやすくなるかとも思いました。
→ 最初に英語の発音で「パイナップル」と言った後に、先生が日本語で？と来たら、ゆっくりと一つ一つ音区切って発音している女子生徒（前列中央）、ストロベリーは「いちご」と全く違う発音でしたが、拍をとりながら発音して日本語の単語としているので、日本語の音のルールとしての拍感覚を習得しつつあると感じました。全般的に児童たちの発音は良く、このへんが大学生に教えている日本語と、日本で生活しながら自己成長と共に日本語を学習していく学習者との違いだと感じました。
- 反復練習をもう少し取り入れて、インフォメーションギャップや、競争する物なんかも楽しんでくれそう（助詞のまわりに単語を置いて、文を作るチーム対抗ゲームなど）。算数が嫌いなようなので、ゲームに少しだけ算数的要素を取り入れる（点数をつける、これができたら何倍のポイントになるなど）と、楽しめるかもしれません。

●授業終了時→机の上をきれいにしてあいさつ

- 消しゴムのかすをゴミ箱に捨てるという、「しつけ」の教育（学習だけでなく生活指導も含めて教育されている）がとてもいいと思いました。
- 「～してください」「～しましょう」など指示文の練習をTPRの教授法でしてもいいと思いました。
- 始まりと終わりの挨拶（これから～時限を始めます／これで～終わります）もしつけ教育があってもいいと思います。時々、クラス（時限によって）で日直（時限の学級委員長）を決めて、担当者を決めるのもいいと思いました。しつけを聞くだけではなく、役割を持たせることで責任感を養えると感じました。例えば、「皆さん、ノートはありますか／ペンがありますか／消しかすを片してください／机を並べてください等」をクラスメートに伝えるなどです。他にも、ゲームがとにかく好きで、休み時間になると奪い合いになるので、「やってもいいですか」「ゲームがしたいです」などの表現も合わせて覚えていくと元の学級に戻った時にも使えると思うし、マナーが学べると思います。

3. 疑問点や今後ぜひ話を伺いたいことなど

- 教室で日本人と混ざって授業を受けるときに、担任の先生が問題と感じているところなど、取り出し授業をしない場合はどのように対応されているのか知りたいです。
- 苦手な科目があると、担任に許可をとってワールドクラスに来る生徒もいたため、その辺りの甘えをどのようにコントロールしているのか気になりました。
- 担任の先生方がどのような工夫をされていて、教室での日本人生徒、外国人生徒、先生のクラスダイナミクスをもう少し知っていききたいですし、ワールドクラスに期待することは何なのか、そして外国人生徒自身は今どう感じているのか（勉強や生活について）もインタビューしてみたいです。

（筆者らによるレポートより）

N小学校の指導員は英語とシンハラ語を使って指導することができる教員である。山武市の児童生徒の大半はスリランカ人であり、英語が通じることで意思の疎通が図れることは、山武

市の取り出し教室の特徴ではないだろうか。ただし、全体の15%はスリランカ人ではなく、尚且つ、スリランカ人児童であってもタミール語等の母語話者もいるので気をつけなければならない。そして、英語を用いることができるのは、N小学校のように全員がスリランカ人で、かつ、英語が理解できる児童がいる場合に限る。英語や媒介語が使用できないのであれば、絵教材を多く用いるなどの工夫があれば良い。N小学校の日本語指導員の1人は元英語教師であり、英語教育のスキルが身についていたため、指示の出し方など、上手にできていたので、今後の活動が期待できる。そしてT先生は、スリランカ人であるため、児童たちは不明な点があってもすぐに確認できる環境にある。そのため、児童の習得の速度は、媒介語が使用できない環境で学ぶ児童より速いのではないだろうか。児童生徒を対象として、媒介語や第二言語を使用した教え方と日本語だけで教えた場合の差については、新たな研究活動が必要と思われる。次に、中学校の授業観察後のレポートについて表3で示し、2022年度に日本語専門家が行った取り出し教室の観察、およびフィードバックについて紹介する。

表3 山武市立K中学校の授業観察レポート

1. 概要
<p>〔訪問先〕 山武市立K中学校 〔実施日〕 2022年6月27日（月）8:10-10:20 〔訪問教員〕 城西国際大学 留学生別科 別科長 林千賀 語学教育センター 佐藤明子</p>
2. 所感
<p>生徒さんは、素直でとてもいいと思いました。また、ちょうど当日に転入してきた生徒さん（Aさん）にお会いできて感動的でした。また、その生徒さんの日本語の理解の速さに驚きました。彼女ならすぐに上達できるだろうと思います。獣医になりたいと言っていたので、高校受験は今から視野に入れて取り組むべきだと思いました。また、K中学では取り出し授業が一人ひとりの生徒によって違い、きめの細かい対応ができていると思った。</p> <p>高校受験まであと1年、2年で大変だと思います。W氏（山武教育委員会）にはお伝えしましたが、テキストはなるべく早い段階で実際に使用している教科書を使用した方がいいのではないかと思います。使用されていた漢字ブックなどは、小学校1、2、3年生の日本人用の教材を使用していましたが、漢字の語彙が文脈の中でどう使用されているのか、意味を理解しないまま、ただ、漢字だけを学ぶのは、あまり意味がないのかとも思いました。高校受験まであまり時間がないので、小学生に対する指導とは少し変えなければならないと思いました。</p> <p>以下、見学を通して気づいたことなどを所感としてまとめました。</p> <p>【全体を通しての所感】</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 生徒さんの日本語の発音はとてもきれいでした。普段からネイティブの生徒さんや先生とやりとりをしているからだと思います。皆、聞き取りやすい日本語だったと思います。 ▶ 中学は英語の先生やALTのSさんがいるので、コミュニケーションの問題がないと思いました。また、取り出し授業では日本語だけを使用していましたが、もう少し、英語を使用してもいいと思いました。例えば実際に使用している英語のテキストを日本語に翻訳して、その日本語を勉強するというのも一つだと思います。あるいは『げんき』（ジャパンタイムス出版）という教科書を使えば英語で全て説明されているので、あとは付属の練習問題をどんどんしていくだけだと思います。この教科書は欧米系の大学生用に開発された教科書ですが、中学生だったら使用できると思います。1ヶ月1冊のペースで学べば、早く、授業に参加できるのではないのでしょうか。 ▶ 提案としては、プロジェクトワークのようにテーマを決めて生徒さんが日本人学生に英語や日本語で質問し、それに答えてもらうというような活動をしたらいいかと思います。質問をしたり、それをまと

めたりすることで、たくさんの日本語力を身につけられると思いました。

非常にまじめな生徒たちですので絵教材のフラッシュカードを使うなどして、短時間の語彙や表現、文字の確認などをしていくと、集中できますし、吸収しやすいのではと感じました。

【授業の場面ごとの気づきと提案】

●授業の中でのやりとり

- 先生が質問、そして生徒が答えるという形で、一方向ばかりでした。このやり方だと自分で質問することができなくなってしまいます。生徒さん同士のやりとりや、生徒が質問をするなどの活動があつていいと思いました。インタビュー活動（例えば、好きなものを聞く、好きな食べ物を聞く、将来になりたいことを聞く）などされてはいかがでしょうか。
- 取り出し授業では、文字の時間が多く生徒の発話量が少ないのが気になりました。何度も復唱させたり、インフォメーションギャップなどを取り入れて、発話できる機会があると会話力と積極性が養えると思います。
- 訪問日に来た生徒は、この日が初めての取り出し授業でした。自己紹介も必要ですが、教室で使える表現をフレーズで導入してもいいと思います。例えば、「もう一度言ってください」「英語で言ってください」「何ですか」「英語で何ですか」など簡単なものでもいいのであると、教室に戻った際に活かせるのではないのでしょうか。

●文字の学習

- 文字を書かせることは宿題でもできると思いました。それよりももっと話す練習をしなければならないと思います。インタビューをしたり話す活動をしたりしなければならないと思います。
- 文字の学習について、文字と意味を一致させる必要があります。漢字は1つの述語だけを覚えるのではなく、文脈の中でどのように使うか、学ぶ必要があると思いますので、英語で意味を教える必要があると思いました。
- 漢字を書く練習はやるなら時間は短くした方が集中できますし、文字への苦手意識も減ると思います。できれば、多読の本、絵本などを1冊読むなどして、絵と文字と文脈を一致させていくのもいいと思います。

●自己紹介

名前、組、だけではなく、好きなものや日本で何をしたいかなども盛り込んで自己紹介ができるようになるといいと思いました。もう少し、難易度を上げられるといいと思いました。

3. 疑問点や今後ぜひ話を伺いたいこと

- 教室で日本人と混ざって授業を受けるときに、担任の先生が問題と感じているところなど、取り出し授業をしない場合はどのように対応されているのでしょうか。これは小学校訪問でも同じように疑問に感じました。
- 中学校では進学も考慮した取り出し授業の実施が求められるかと思いますので、生徒たちが自身のキャリアをどう考えているのか、家族、担任の先生、取り出し授業の教員とすり合わせていけないかぜひ伺いたいです。

（筆者らによるレポートより）

K中学では、日本に来日したばかりの生徒も基本的な日常会話はできる生徒もいて、教員が工夫して授業を行わなければならない環境であった。また、高校進学を控えて漢字力向上のための学習が取り入れられていた。この中学校では英語教員やALTと英語でコミュニケーションが取れる環境にあるので、教員と生徒との意思疎通はスムーズであることがわかった。

上記（表2・表3）のように、筆者らが行ったフィードバックをデータ化し、分析・考察を加えることで、担当教員に対する支援を明らかにすることができるのではないだろうか。従って、このような支援を継続し、研究活動に繋げたいと考える。

以上、第2章と第3章では、筆者ら日本語教育専門家による具体的な支援について紹介した。1つ目は取り出し教室の担当者や支援者を対象とした講習会の概要で、2つ目は、2022年に専門家が取り出し教室の観察を行った際のフィードバックを提出されたレポートからまとめ

たものである。次章では、筆者ら日本語教育専門家による研究活動についてリサーチクエッションや目的などについて概要を述べることとする。

4. 研究活動について

筆者らが行う研究³の目的の1つは、山武市の外国をルーツにもつ外国人児童生徒のための支援者たちの日本語支援の実態を明らかにしつつ、研究結果を踏まえ、日本語支援のための教育施策を提案することである。本研究では、日本語指導者、教科教員、児童に関わる支援者（山武市教育委員職員や本学の学生など）、ご父母などを総じて「支援者」と呼び、支援者を対象に調査を行っている。

山武市の外国人児童生徒は、急激に増加したため、山武市としての日本語支援体制は確立されておらず、本研究は、山武市外国人児童生徒のための日本語教育の実態を明らかにするとともに教育向上のため以下のリサーチクエッションの結果から教育方法を提案することである。リサーチクエッション（RQ）は以下、3つある。

RQ1) 山武市の日本語教育支援体制は、何か。そして専門家の介入がどう影響するか。

RQ2) 山武市の外国人児童生徒の日本語能力をどのように評価（アセスメント）するのか。

RQ3) 山武市の外国人児童生徒のための日本語支援は何か。

以下に研究のイメージ図を示すこととする（図3）。

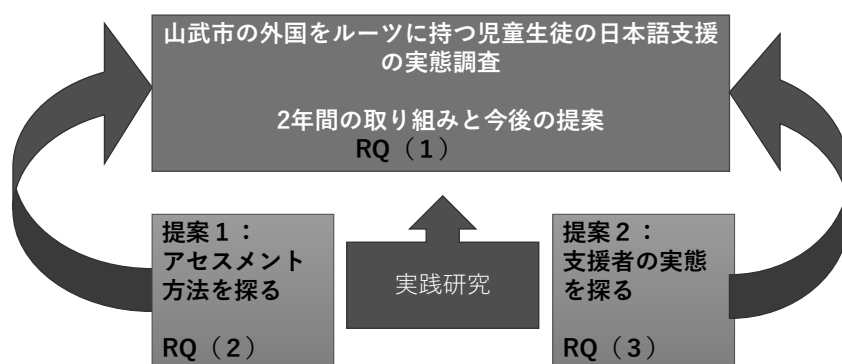


図3 期待される本研究のイメージ図

（筆者ら作成）

QR1 については、山武市の日本語教育支援体制を明らかにした上で、本学研究グループが関与することによってどのように変容し、自ら課題を見つけて行くのか、講習会や交流会でできたことなど2022年度と2023年度の本学の支援活動を追い、その変容を明らかにする。また、

林ゼミ生が使用する「やさしい日本語」でのやりとりがどの程度、支援活動に役立ち、多文化共生教育にどう影響するか検討する。

次にQR2において今年度は、どのように評価するかパイロットテストを行う。アセスメントは、「外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント (DLA)」と「CEFRに準拠した日本語口頭産出能力評価法 (OJAE)」導入の検討を行う。2つのアセスメントの比較は次年度以降に行う。

そして、QR3は、外国人児童生徒に対する教育支援の現状を明らかにするため、支援者を対象にインタビュー調査を行い、日本語を支援する上での感動や困難さを明らかにし、児童に対する最善の支援策を検討し、今後の日本語支援教育につなげるための提案をする。今年度は、日本語指導員とご父母を対象にインタビューを行っている。

以上の3つのリサーチクエッションの研究結果から得た知見を教育的施策として山武市に還元し、山武市の外国人児童生徒のための日本語教育に貢献することが期待される。そして本学の日本語教育専門家が支援者となり、地域の日本語教育に貢献することを大きな目的とし、研究活動を続けていきたいと考えている。アセスメントについては、「CEFRに準拠した日本語口頭産出能力評価法 (OJAE)」と「JSL対話型アセスメント (DLA)」を比較しながら検討していく手法は、これまでにない独創的な点である。そして、山武市の外国人児童生徒の80%以上は、スリランカ人児童であり、支援者と児童生徒間において英語でのコミュニケーションが可能となっている。日本語初期段階でも英語を媒介語として使用できる日本語支援は稀であり、独自性が期待でき、研究意義がある。

5. おわりに

第1章では、筆者ら日本語教育専門家がどのようにして山武市教育委員会から依頼を受け、支援を行うことになったのか、その経緯と背景を述べた。そして山武市の外国人児童生徒への日本語教育支援のために行っている支援はどのようなものか、概要を述べた。第2章では、今年度実施された「日本語教室担当者会議」での講習会について担当者ごとに概要を述べた。講習会は、ニーズを確認した上で実践的な指導方法や、アセスメントについての内容が主であった。次に第3章は、2022年に行った小中学校での授業観察のフィードバックのレポートについて概要を示した。そして、第4章では、筆者らが2023年から取り組んでいる研究の概要とリサーチクエッションについて述べ、今後の展望について述べた。

今後はリサーチクエッション毎に研究を深めていきたいと考えている。支援者の実態調査、アセスメントに関する研究を継続して行っていきたい。また、支援者でもある本学学生の日本語支援の変容についての研究も今後の課題である。そして、これらの研究成果と結果から得られた知見を山武市教育委員会に提供し、それが地域貢献となれば幸いである。

【注】

- ¹ 正式名称は「山武市及び山武市教育委員会と城西国際大学との外国人児童生徒の日本語教育支援に係る連携協定」である。
- ² 本学国際交流演習（林ゼミ）での2022年度の取り組みは、林（2023）で実践報告がされている。
- ³ 本研究は、2023年度城西国際大学学長所管研究費研究奨励制度による支援を受けて開始された。そして城西国際大学研究倫理審査結果において「承認番号：05T230019」を得ている。

【参考文献】

- 石渡裕子（2020）「我が国の外国人児童生徒等に対する日本語教育」『レファレンス（The Reference）』、国立国会図書館835. 29-50.
- 川上郁雄（2020a）『JSLバンドスケール【小学校編】—子どもの日本語の発達段階を把握し、ことばの実践を考えるために—』明石書店
- 川上郁雄（2020b）『JSLバンドスケール【中学・高校編】—子どもの日本語の発達段階を把握し、ことばの実践を考えるために—』明石書店
- 熊崎さとみ（2003）「外国人の義務教育就学をめぐる諸問題—ブラジル人児童・生徒の場合—」『信州大学留学生センター紀要』、4. 139-149.
- 大野恵理・原瑞穂（2016）「外国につながる子どもたちの保護者の教育参加：「母」としての移住女性のかかわりに注目して」『上越教育大学研究紀要』、35. 105-115.
- 田中真弓・田邊正明・神山英子（2022）「JSL対話型アセスメント『DLA』（四日市版）の作成と検証—外国にルーツを持つ児童生徒の「話す」「書く」の力に注目して—」『三重大学教育学部研究紀要』、73. 489-504.
- 中野裕美子（2016）「対話型アセスメントDLAをどのように日本語指導にいかしたか—小学校でのJSLカリキュラムづくりへの取り組み—」『子供の日本語教育会第一回大会』ポスター19（実践発表）2016年3月26日於：東京女子大学56-57.
- 萩原幸司・山田ボヒネック頼子・劉星・山下佳那子・梅津由美子・大室文・酒井康子・高木三知子・鞠古綾（2023）「オンライン OJAE（Oral Japanese Assessment Europe）道場—CEFR 準拠 OJAE に基づき、日本語教師が協働鍛錬する拠点—」『ヨーロッパ日本語教育』、26. 136-172.
- 萩原幸司・山田ボヒネック頼子・梅津由美子・大室文・小熊利江・酒井康子・高木三知子・鞠古綾（2022）「CEFR 準拠 OJAE「ワークショップ」—言語能力測定からコミュニケーション力観察へ—」『ヨーロッパ日本語教育』、25. 104-134.
- 萩原幸司・梅津由美子・酒井康子・高木三知子・山田ボヒネック頼子（2020）「OJAEで測る日本語コミュニケーション能力—日本語対話・協働・自己啓発の道—」『ヨーロッパ日本語教育』、24. 204-238.

- 林千賀（2023）『『やさしい日本語』の学びを実践につなげるまでのプロセスー大学のゼミの学びー』
『JIU 日本語教育実践報告集』，4 号．34-45. 城西国際大学（WEB 出版）
- 林悠子（2021）「外国につながる子どもの保育における家庭との連携の課題：子どもの言語発達の視点から」『神戸松蔭女子学院大学研究紀要』，2. 67-81.
- 藤原安佐（2022）「日本語を母語としない保護者とのコミュニケーションー北海道 A 保育園の調査から支援の在り方を考えるー」『日本語・国際教育研究紀要』，25. 45-67.
- 古川敦子（2017）「外国人児童生徒の教育において教員が感じる困難および意義に関する一考察」『共愛学園前橋国際大学論集』，17. 39-50.
- 山下順子，成利楽，渡部倫子（2022）「外国人保護者の持つ育児コミュニティへの参入意識」『広島大学日本語教育研究』，32. 1-7.

URL 参考文献

- ・ 文部科学省「外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント DLA」（2023 年 1 月 30 日検索）
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1345413.htm
- ・ 文部科学省「外国人児童生徒の総合的な学習支援事業 外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント」（2023 年 1 月 30 日検索）
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/___icsFiles/afieldfile/2018/05/24/1405244_1.pdf
- ・ 文部科学省「外国人児童生徒受入れの手引き」（2023 年 4 月 23 日検索）
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/1304668.htm

Support for Japanese Education for Foreign Children Required by Universities: From the Case of Collaboration between Sanmu City, Chiba Prefecture and a University

Chiga Hayashi, Kôji Hagihara, Mari Takayanagi
Akiko Sato, Miwako Honjo, Miyuki Hatori

Abstract

In recent years, in Sanmu City, Chiba Prefecture, which is adjacent to Narita International Airport, the number of children from Sri Lankan families involved in trade has increased rapidly. Therefore, nine elementary and junior high schools in the city provide Japanese language support for “TORIDASHI-Class”, and efforts are being made to improve the Japanese language skills of children. Because of large Sri Lankan community in Saumu, the Saumu City Board of Education had to accommodate a large number of children, and asked Josai International University for support on how to implement Japanese language learning for them. In addition, the authors and other faculty members involved in Japanese education at the university (hereinafter referred to as Japanese education specialists) began to implement Japanese language support activities with the seminar in March 2022. The main support so far has been seminars by Japanese education specialists at the University for the Board of Education, Japanese language teaching teachers, and Japanese language support staff in cooperation with the Sanmu City Board of Education, observation of the support site of the TORIDASHI-classroom and feedback to the support staff, and exchange meetings for Sanmu City children practiced by students of the university’s Seminar (Hayashi seminar). From 2023, in addition to this support, the authors’ research activities have begun. Therefore, this paper specifically reports on the activities and research activities of Japanese support by Japanese education specialists required of universities.

Keywords: foreign children, Japanese language support, exchange meetings, assessments, practical
Japanese education